



学会報告
“第5回北陸エピジェネティクス研究会”

矢追 毅

(京都府立医科大学・大学院・分子病態病理学)

さる12月4・5日に富山大学で開催された北陸エピジェネティクス研究会(幹事:甲斐田 大輔先生)に今回初めて発表を含めて参加させていただきました。北陸地域におけるエピジェネティクス研究の振興、情報交換を目的に年一回開催され、今年で5回目となります。2日間にわたる一般口演20題(うち大学院生8演題、企業2演題)の発表のほか、今年度は日本エピジェネティクス研究会第12回年会的サテライト研究会ということで、前島一博先生(国立遺伝研)、塩見美喜子先生(東京大)をお招きしての特別講演も開かれました。「超解像イメージングによって明らかになった生細胞のクロマチン構造とそのダイナミクス」と題した前島先生の御講演では、生きた単一細胞エピゲノム研究の最前線の一端をご紹介いただきました。今後もイメージング技術の進歩が、転写とエピゲノムに関する研究において大きな役割を果たすであろうことが改めて印象づけられました。塩見先生は「生殖ゲノムを守るpiRNA機構の分子メカニズム〜ショウジョウバエをモデル生物として」と題してpiRNAの基礎から最近の知見までご紹介いただきました。限られた時間のなか、生物種間の違いも含めて見通しよく解説いただき、門外漢の私としては勉強になりました。研究会全体として、ヒト・マウスのみならず、酵母・ショウジョウバエ・ミツバチ・魚類と種々の生物を研究材料に、細胞や個体レベルの様々な事象や疾患が対象としてとりあげられ、新たな技術・技法に関する演題もありました。コンパクトながら多彩さがあり、北陸地域におけるエピジェネティクス研究の裾野の広さを感じました。後述のように、未発表データにもとづく議論の場という本会の性格上、各一般口演の内容紹介は控えさせていただきますが、本会HPでは第1回から今回までの概要や発表演題リストをご覧ください(<https://sites.google.com/site/hokurikuepigenetics2/>)。今回の参加者数は100名弱、日本エピジェネティクス研究会年会参加

者の約1/3と決して少なくはないのですが、「地域の振興」の看板どおり、学生・院生がその7割を占めていました(写真1)。彼らがエリアのエピジェネティクス研究者や同世代の人たちの仕事に触れエンカレッジされる良い場になっているのではないかとというのが初日の印象のひとつでした。また初日の晩には居酒屋での意見交換会があり、鎌倉昌樹先生(富山県立大)のミツバチ研究の苦労話など興味深いお話を聞くことができ交流の良い機会となりました。



写真1. 当日の学会の様子

ところで本研究会設立のきっかけは、「北陸地区国立大学学術研究連携支援」というグラントに「エピジェネティクス研究プロジェクト」[代表:沖 昌也先生(福井大)、堀家 慎一先生(金沢大)、甲斐田大輔先生(富山大)]として採択されたことだそうです。この支援の目的は、北信越の大学が連携し勉強会等の開催を通じて相互の研究に接点を見出し、異なる分野間での共同研究を進めることにありました。そしてその一環として、大きな学会ではまだ発表できない未発表データにもとづく積極的な議論の場、学生の初めての学会参加あるいは口頭発表の場を提供するために本研究会が設立されたということです。その後も、学生の研究モチベーションの向上や北信越での研究活性化を目的に毎年開催さ



れています。多くの学会では久しく、論文としてアクセプトもしくは掲載された内容について発表されることが通例となり、こうしたスタイルは今では珍しいかもしれません。聴く者の立場からは、発表者が抱える課題に「こんなアプローチはとれないか」などと自分の課題として考えながら聴く要素が増して、コンパクトな研究会ながら触発される点もありました(写真2)。また本会では参加者投票による学生ベスト発表賞が設けられており、今回は福井大の2名が受賞されました。「人生初めての学会発表」で受賞された方の喜びの表情には、学生のエンカレッジという本会の意義のひとつがよく現れていたと感じます。後日お聞きした沖先生のお話しにもそのことがよく伺えます - 「ここ1ヶ月は、学会発表に向けて少しでも多くの実験結果を報告したい

と土日も実験していましたし、夜遅くまでスライドを作ったり、発表練習したりと側から見ても、今回の学会で発表することが本人達の高いモチベーションに繋がっていることが分かりました。結果としてそのうち2名が賞をもらいましたが本当に喜んでいました。学生には良い経験の場になっていると思います」。今回初めて参加してみて、エピジェネティクス研究がより活性化されるような地域・エリア単位での活動が持つ可能性についても教えていただいたように思います。

来年は、関西圏からもアクセスしやすい福井大学での開催が予定されていますので、ご興味をもたれた方は参加されてみてはいかがでしょうか。



写真2. 参加者集合写真、著者は左から4人目



学生優秀発表賞を受賞された2人から感想を寄せていただきました

▶ 第5回北陸エピジェネティクス研究会に参加して

澤 保

(福井大学大学院工学研究科 生物応用科学専攻
博士前期課程1年)

12月に富山大学で行われた第5回北陸エピジェネティクス研究会に参加させていただきました。人生初の学会参加であり、これまで学会というものにどこか堅苦しい印象を持っていましたが、北陸の冬の寒さにも負けない熱い討論や、自由な質問や意見交換が行われており、とてもアットホームな雰囲気でした。

私は「エピジェネティックな遺伝子発現制御に着目した白内障発症メカニズムの解明」というテーマで口頭発表をさせていただきました。実験と発表練習の両立は思った以上に難しく、当たり前のようにこなす先生、先輩方には感服いたしました。発表では緊張もありましたが、様々な先生方に貴重なご意見やアドバイスをいただき、感謝の気持ちと共に、学会参加の重要性を感じることが出来ました。一方で、同世代の学生の研究発表には非常に刺激を受け、自分も今以上に頑張らなければという気持ちにさせられました。

また、今回新たに創設された学生優秀発表賞に選出していただきましたことをこの場をお借りしてお礼申し上げます。来年もまた、この素晴らしい学会に参加できるよう日々精進し、研究を行っていきたいと思います。



写真1. 受賞後の写真(左が澤、右が根尾)

▶ 第5回北陸エピジェネティクス研究会での経験を生かして

根尾 卓磨

(福井大学工学部 生物応用化学科4年)

私は今回初めて本学会に参加し、発表もさせて頂きました。不慣れな学会という場への参加は少し緊張もしましたが、それ以上に、エピジェネティクスについての最新の研究内容を学ぶことがとても楽しみでした。

私はまだエピジェネティクスについて勉強を始めたばかりですので、わからないことも多くありましたが、ところどころ理解できた内容が自分の研究に何か生かせないかと考える瞬間はとても楽しく、また嬉しくも感じました。なかでも、特別講演の塩見美喜子先生のトランスポゾンについてのお話では、どのように研究を進めてきたのか、そのアイデアに感動しただけでなく、理解が追いつかなくなる程の膨大な実験データに圧倒されました。第一線で活躍されている先生の研究に向けた熱意を肌で感じられた事は今後の研究生活にとって大変貴重な経験であったと思います。

私の研究はまだ始まったばかりという事で、学会発表に対して不安な気持ちは少なからずありましたが、自分の考えを発信し広い視点から議論することのできる機会を逃すわけにはいかないと思い、挑戦させて頂くことを決意しました。少ないデータ量での発表にも関わらず、たくさんの先生方がアドバイスを下さっただけでなく、学生優秀発表にも選出して頂きました。副賞のトロフィー(写真2)を受け取った瞬間は喜び以上に、次も発表させて頂けるように頑張ろうというやる気がこみ上げてきたことを鮮明に覚えています。このように評価して頂いたことに自信をもって、今後もより一層研究に励みます。



写真2. 副賞のトロフィー



情報を求めています！！

研究員・ポスドク募集および他の研究会のお知らせなど、ニュースレターを利用して公開してみませんか。年会に関するご意見・ご感想もよろしくお願いたします。お近くの広報委員に気軽にe-mailください。

(代表) 中島欽一 (kin1@scb.med.kyushu-u.ac.jp)
梅澤明弘 (omezawa@1985.jukuin.keio.ac.jp)
古関明彦 (koseki@rcai.riken.jp)
胡桃坂仁志 (kurumizaka@waseda.jp)
中山潤一 (jnakayam@nibb.ac.jp)

日本エピジェネティクス研究会事務局

佐賀大学医学部 分子生命科学講座
分子遺伝学・エピジェネティクス分野内
庶務担当幹事：副島英伸
担当：八木ひとみ

住所：〒849-8501 佐賀県佐賀市鍋島5-1-1
TEL: 0952-34-2262
E-mail: jse-jimukyoku@ml.cc.sags-u.ac.jp